

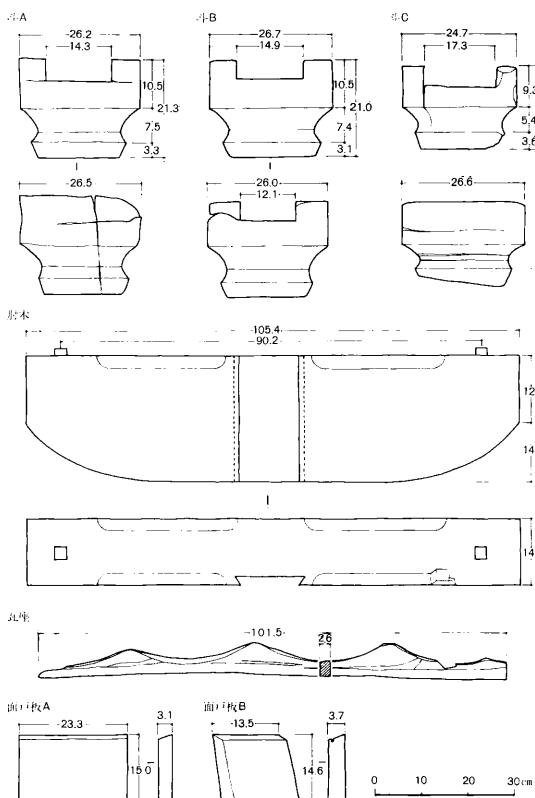
柏ノ森遺跡出土建築部材の調査

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

遺跡は京都市伏見区醍醐柏ノ森町にある。昭和47年7~12月に鳥羽離宮跡調査研究所・六勝寺研究会・京都市文化財保護課によって発掘調査が実施され、建物2棟（八角円堂および方三間堂）・庭園などを検出したが、同時に周辺より多数の建築部材を発見した。特に方三間堂周囲からは大仏様の特徴をもつ遺材が多数見出された。これら建築部材の調査に当研究所が協力した。

組物は斗8（大斗片1個を含む）・肘木1が出土している。斗はすべて皿斗付で、卷斗（A）・方斗（B）・延斗（C）各1個がほぼ完形を残す。斗A、Bは幅9寸、背7寸と復原され、他の大仏様建築の斗に比べて背が高い。斗Cは幅8×9寸、背6寸である。また皿斗は斗尻幅6寸、背1.2寸である。これら3個の斗尻には、いずれも太柄穴がないのに対し、肘木両端には角太柄が残る。肘木は幅4.7寸に対し、背9寸とやはり背が高いのが特徴である。上面に水縁をもち、背面には挿肘木にかかるとみられる蟻仕口が残る。

軒回り材には垂木1、面戸板6、瓦座8がある。垂木は幅3寸、背4.7寸の直材で背がかなり高く、断面積も浄土寺浄土堂使用の垂木の1.2倍と大きいので多少疑問がある。面戸板の背は垂木背に一致しており、桁上にあって垂木間に使用されたと考えられる。なお扇垂木間に用



第1図 建築部材実測図

いられたと見られる面戸板が1枚出土している。垂木・面戸板から垂木割は約1.1尺と推定される。瓦座は細片が多いが、最長のもので1m強を残す。瓦割は約1尺と見られる。この他木鼻細片1、野地板などの板材、多数の壁小舞等がある。

方三間堂は浄土寺浄土堂と同一平面をもち、純粹の大仏様によって建てられていることから、南無阿弥陀仏作善集に見える重源建立の「柏森堂」に比定できる。斗の背が平安朝風に高く、肘木に水縁をもつこと、重源と醍醐寺との関係などからみると、比較的初期の作品である可能性が考えられ、中世建築史上貴重な発見ということが出来る。

（藤村 泉）